
かがみやさん、いっかいにひゃくえん

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かがみやさん、いつかにひやくえん

【Nコード】

N7891J

【作者名】

遼

【あらすじ】

不思議な鏡を見ることのできる鏡屋さん。店主は少女で、お客さんは日に数人。今日のお客さんは誰だろう。

ここは場末の鏡屋さん。置いてある鏡は一つだけ。

店主は少女というにも小さな少女で、店員はいない。

店の雰囲気はまさしく小ぎれい、黒い壁紙に薄い茶色のフローリング、その奥に白い木で組まれた個室があるだけ。受付に少女が座つてにこりと笑っている。入り口のドアには外から見て張り紙が一枚。「一見さん大歓迎。二見さんはお断り」。

お客さんは日に数人。今日の一人目は疲れた顔をしたサラリーマンだ。

「にひやくえんです」

少女がにっこりと手を差し出して、サラリーマンは疲れた顔のままそこに硬貨を二枚。

そんなに疲れたサラリーマンがどうして鏡屋さんに、という質問には店主がお答えします。

「きまぐれさんですね」

その通り。ここには気まぐれさんしか来ないのだ。

案内も何も無い、個室へどうぞと言われるがまさにそこへ入っていくサラリーマンを見届けてから、少女は何事もなかったように真正面に向き直つてにこりと笑う。

サラリーマンは疲れた顔で個室に入り、くたびれたパイプ椅子にどっかりと腰を下ろした。パイプ椅子が壊れるんじゃないかと思うような勢いだっただけれど、彼はとても丈夫だからなんともなかった。気遣うような余裕もなかったんだろう。

目の前には大きな鏡。鏡というにはうすばんやりとしてて視界が

悪い。

ふわっと羽がなぞるように、そこに少しだけの視界が生まれる。映ったのは新人時代のサラリーマンだった。会社のために、上司のために、自分のために、お金のために、とにかくがむしゃらにがんばっていた時代のサラリーマン。

疲れた彼にはそれはまるで挑発にしかない。パイプ椅子をがしゃんと蹴飛ばして、乱暴にドアを開けると、少女が彼を見てにこりと笑っていた。すっかり氣勢をそがれてしまって、サラリーマンは「どうせ二百円だ、せめて二百円分、この奇妙な鏡を楽しもう」と改めてドアを閉め個室にこもった。

しっかりとパイプ椅子を直して、そこへゆっくりと腰掛ける。改めて見る鏡はぴかぴかで、個室の様子が全部見えるようだった。

映ったのは悲しそうなサラリーマンの顔。情けなくて情けなく、もらい泣きしてしまいそうなほど悲しい顔だ。

サラリーマンはため息をこぼして俯き加減。

「私は何をしてるんだろう」

気まぐれに入った鏡屋で、自分にまで情けないと言われて。

「何をしてるんだろうなあ」

あの頃はよかった。何事も新鮮で、やることなすことにやりがいがあった。褒めてくれる人もいたし、叱ってくれる人もいた。それからそれを分かち合う仲間も大勢いたのになあ。

懐かしむように視線を上げると、初めての大事な仕事を事に成功させた時の自分がそこにいた。あのときそのすばらしさに鳥肌が立った。うれしそうに肩を叩いてくれる仲間、それからいつも怒ってはかり叱ってばかりの上司も満面の笑みを浮かべて、まるで昨日のことのように頭に浮かぶ。いや……鏡に映っているじゃないか。

「何をしてるんだろうなあ」

今ここにいる自分は何をしてるんだろうか。それに比べてなんて疲れた顔をしてるんだろうか。

そこへ声が飛んできた。小さな小さな少女の声で、この狭い店内

にはとてもよく響く。

「かがみ、ちゃんとおきやくさんがうつっていますか？」

これにはサラリーマンは驚いた。

いやはや、私が今いるのはどこなんだ。

鏡屋だろう、映っているのが自分でないはずがないじゃあないか。

「ああ、ちゃんと映っているよ」

「よかったです。たのしんでくださいね」

これまた驚いたサラリーマン。この店主は何もかもお見通しだ。

確かにこの鏡は楽しい。これだけ怒ったり悲しんだりしたのは随分久しぶりだ。喜んだのも随分なかつたように思う。

同時に思うサラリーマン、今まで見ていたのは何だったのだろうか。業務成績だろうか。上司の顔色だろうか。部下の仕事だろうか。

取引先のご機嫌だろうか。あるいは妻のか？ 子供の素行も気になつていた。

……「私はどこにいるんだろう」

目の前の鏡に問いかける。

誇らしげなサラリーマンの顔が映っている。

……「私はここにいな」

そりゃあそうとも、これは鏡なのだから。

ふと背後が気になって視線を向けると、そこには……ドアがあるだけだ。

ここにいるのは自分だけ。

「自分勝手に何が悪いんだ」

背中を気にする必要がどこにあるんだ。

右を見て壁を見つけて、右を見ることの無意味に気づく。

左を見て壁を見つけて、左を見ることの無意味に気づく。

目の前には自分がいる。ありのままの自分の姿だ。

疲れてはいない。とても誇らしげだ。

「私はサラリーマンだ。サラリーをもらうことに喜びを感じる。…

…明日は給料日だな、家族で旅行にでも行ってみよう……」

サラリーマンはパイプ椅子から立ち上がって個室から出た。

少女がにこりと笑っている。

「いや、楽しかった」

「ありがとうございます」

そういえば、仕事以外でお礼を聞くのも久しぶりだ。

「ありがとう」

言うのも久しぶりだったな。

今夜は食事の前に「いただきます」を言ってみよう。温かいご飯と味噌汁を前にして、よだれでも垂れなければいいのだが。

サラリーマンが出て行くと、少女はにこりと笑った。

いつもにこりと笑っている。それ以外の表情を知らない。

今日の二人目は疲れた若者だった。

「にひやくえんです」

にこりとしたまま手を差し出すと、若者は何も言わずに硬貨を二枚、その小さなてのひらに置いた。

「ごゆっくりどうぞ」

若者は少女を一瞥してから個室へ入る。

少女は何事もなかったように真正面に向き直り、にこりと笑った。

パイプ椅子に力なく座った若者は、何も映らない鏡を見てがっくりとうなだれた。

騙された、と思ったのだ。

「あんな小さい子供にまで騙されるなんて、俺も随分焼きが回ったなあ」

思えばいいことなんてなかった。

高校受験に失敗した。勉強をしてこなかったからだ。何せ若者には夢がある。そうとも、彼の絵の才能ときたら周囲の誰もが認める

ところで、それで食べていけるものだと思っていたのだ。

周囲が認める彼の才能を、その道の人たちは誰も認めなかった。周囲の皆が大学へ入るようになって、少しだけ焦りが生まれた。皆勉強だのサークルだの、忙しそうにしながらもすごくいい顔をしている。笑うことも多い。

ようやく個展を開かせてくれると言ってくれた人がいた。まったくもってうまい話もあったもので、飛びつくようにしてその小さな美術館の使用料を払ったら、そこはただの空き家だった。

いいことなんてないもんだ。

もう何枚、何十枚、何百枚絵を描いたことだろうか。その道に生きる人たちは、その中の一枚もじっくりと見てくれたことはなかった。

いいことなんてこれから先もないんだろうなあ。

前を見ると、鏡に映った自分が見えた。

子供の頃の若者だ。

「……」

若者は何も言えずにそれを見つめた。

頭に浮かんだのは、両親が初めて自分を褒めてくれたときの言葉だった。「お前は絵がうまいんだなあ」とまるで自分のことのようにうれしそうな顔をしたのを覚えている。

うまくなんてないんだよ、父さん、母さん。俺の才能なんて大したことにはなかったんだ。

情けなくて情けなくて、それからふがいなくて、いてもたってもいられない気持ちになった若者は、一つ文句でもつけてやろうと椅子から立ち上がってドアを開けた。

少女がにこりと笑って若者を見ていた。

「あの鏡、ちゃんと映らないぞ」

「おかしいですね。すいません」

少女はまだまだにこりと笑っている。

「直せないのか？」

「すみません。あとでつくったひとにおしえてもらいます」

受付から動く気もないらしい。それに作った人が別にいるのなら、こんな小さな少女にできることもないだろう。すっかり氣勢を削がれた若者も、「いくらフリーターの俺でも、二百円にぎゃあぎゃあ騒ぐことはないか」と呟いて、個室へ戻った。

パイプ椅子に座りなおして前を見ると、鏡には真剣な顔をした若者が映っていた。

「描いてるとき、こんな顔してんのかな」

描いてるときの若者といえば、絵の方にまったく夢中で、自分の姿を気にしたことなんてなかった。顔には絵の具がべったりついていて、エプロンも何度洗濯しても落ちないほどカラフルになってしまっ、髪の毛もぼさぼさで何度かきむしったものかもわからないほどだ。だらしのないものだど苦笑しながら、その顔にふと見覚えがあるなあと疑問を抱いた。

どんなものだろう、この顔は。

どこで見たんだったかなあ、この顔を。

考え込むうちに背中が丸まって、目は閉じられて、若者は暗闇の世界へ落ちていく。

そういえばこんなふうに色々考えるのは久しぶりだ。絵を描くことに無心になって、周囲をうらやんで、認めてくれない現役のプロやプロモーターを何度も何度も恨んだりなじったりしていたから、まったく暇がなかった。

何が楽しくて絵を描いてるんだろう。誰も認めてくれないのに、あぶく銭稼ぎながら随分苦しい生活をして、親にも散々迷惑をかけているのに。もういつそやめてしまおうか。

ああ、ダメだダメだ。首をぶんぶん振った若者は少しめまいのようなものを感じて、慌てて目を開けた。

うれしそうな若者がそこにいる。

「この顔って」

両親に褒められたときのものだろうか。それから中学時代に初め

て友達に見せたときのものだろうか。あのときは美術の授業中で、「お前絵うめえなあ」の音がクラス中に広がって、あわや授業中断とばかりの騒ぎになったんだ。照れてしまっただけじゃないとかそういうところじゃなかったけど、こんな顔をしていたのだろうか。それとも高校受験にぶち当たって、将来のことについて考えていたとき

両親や友達に「絵描きにならないのか？」と言われたときの顔だろうか。目の前に光が見えたあのときの顔だろうか。

「ちゃんとうつりましたか？」

店主の少女の声が聞こえた。

誰も認めてくれない？

なんでそんなことを言っていたんだろうか。

プロやプロモーターが世界のすべて？

誰がそんなことを決めただろう。

両親や友達は何の絵のことを何と言ってくれていた？

それは認めるということじゃあないのか。

ほら見る、目の前に何がある。

目の前には、誇らしげな自分がいるだろう。

「映ってるよ」

「よかったです」

夢を追うことの何が悪い。両親には迷惑をかけているけど、生活費は払ってる。将来のことがわからないのは俺だけじゃないだろう。俺をよく知る人たちは皆、俺の絵をうまいもんだと言ってくれるぞ。俺の友達が、両親が、大切な人たちが、絵で金もらってる人たちよりも劣った目をしてるなんて、誰にも言わせやしない。

そうだ、周りの景色を描いてみよう。暗たんとした気分とか、将来への希望とか、そういうものはちょっと捨てて、周りの景色をたくさん描いてみようじゃないか。

「こうしちゃいられない」

急いで立ち上がって乱暴にドアを開け、そしてなんでかゆっくりとドアを閉め、前を見る。少女がにこりと笑っている。

「すげえ楽しかった。ありがとな、鏡屋」

「ありがとうございます」

舌足らずな声に思わず笑う。

そういえば笑ったのも随分久しぶりだ。将来のことも含めて、帰ったら両親と色々話してみよう。それから友達に電話して、他愛のない世間話でもしてみよう。

あんまり笑いすぎて、絵筆を持つ手が震えたりしなきゃあいいけどなあ。

まあ、それをネタに笑ってくれるならそれもいい。友達はそれも笑ってくれるから。

若者が出て行った店内で、少女がにこりと笑っている。

微動だにせず、お客さんを待ち続けている。

十分……二十分……一時間……二時間……今日はもう来ないようだ。

店じまいしてしまおう。お客さんが気まぐれなら店主も気まぐれ、彼女はまだまだ小さい少女なのだ。

鏡を片付けよう。個室に入った少女はふと鏡に映る自分の姿を見た。

笑っている。

「たのしいですね、かがみやさんは」

そうとも、お客さんが楽しいと言ってくれることが何よりも楽しい。そりゃあ今日はうまくいったほうで、時には怒られたりがっかりされたり、お客さんが一人も来ないことだってあるけれど。こういううまくいく日があるから、鏡屋はやめられない。

そういえばこのかがみをつくったひとは、どうしてこれをつくったんだろう。

……きつとわたしみたいに、たのしいって言ってほしかったんだな。

だってあのひとは、「いつもわらっててかわいいねえ」といつてくれて、それからこのかがみをくれたんだもの。

「あしたもうまくいってくれるといいなあ」

少女はにこにここと笑いながら鏡に布をかけて、「ありがとうございました」と鏡に向かってお辞儀をした。

ここは場末の鏡屋さん。置いてある鏡は一つだけ。

店主は少女というにも小さな少女で、店員はいない。

店の雰囲気はまさしく小ぎれい、黒い壁紙に薄い茶色のフローリング、その奥に白い木で組まれた個室があるだけ。受付に少女が座ってにこりと笑っている。入り口のドアには外から見て張り紙が一枚。「一見さん大歓迎。二見さんはお断り」。

お客さんは日に数人。けれどそれでも構わない。

だって少女は少女だからして、笑っているだけで愛してくれる素敵な両親がいるのだから。

(後書き)

読了ありがとうございます。

息抜きに書いたものなので適当感はあるかと思いますが、何かしら感じるものがあればなあと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7891j/>

かがみやさん、いっかいにひゃくえん

2010年10月8日15時08分発行